

「花の回廊」へようこそ（2）

2022. 06. 14

1 また立ち返る水無月の…



① 6月になり長雨が続くと、気もふさぎ出不精になる。若くして亡くなった友のことがしきりに偲ばれる。

梅雨のあいまの曇り日に、秋津が花菖蒲園に撮影しに行くという。わたしは運転手役である。

辺りは小高い丘で、眼下に田畑がパノラマ状に広がる。花の愛好家のTさんが、荒れていた棚田を整備して、さまざまな花菖蒲を植えている。

②育った土地や環境により、花にはそれぞれの個性がある。華やかで元気なものあれば、凜として他から屹立するものもあるし、時には哀れでひがみっぽいものもある。

だから、その日の花の姿、色、形などをチェックして見て回り、よい被写体を選ぶことが最初の作業である。

③ところがこれが簡単ではない。一輪の花菖蒲が咲いているのは、わずか 2～3 日。雨が続き風で花が散ったりして、タイミングがあわないことがほとんどである。時には、これと思う花に巡り会うまで、数年も待たなければならない。

④群生する紫の花菖蒲を探したが、これ^{これ}はと思うものがなくあきらめかけていた時、群れから離れて独り咲く花が曇り日に浮かび上がった。純白で、花形もよく、立ち姿にも気品がある。しかも繊やかである。並の花ではない。

花が目に入った瞬間、秋津にはピンとくるものがあったという。千載一遇^{せんざいいちぐう}の機会だった。

⑤よい写真が出来あがった。

梅雨時に咲く、花菖蒲の雰囲気^{ふんぎ}をうまく捉えている。一輪の花菖蒲の他、余計なものは一切ない。何も足すものはないし、引くものもない。

何の^{てら}銜^はいもない素朴な構図である。その単純さが、この白い花の凜としたイメージにぴったりしている。

⑥中央に白い大ぶりの花びらがピタリと位置している。背景の上半分は杉林が続く漆黑、下半分は草むらで萌黄色のグラデーションをなしている。黒と黄の背景は、上下を直線的に二分するのではなく、曲線で分割している。それが優しいイメージを与える。

⑦しかし、よく見ると花茎は上に向かってわずかに左にスライスし、その位置も写真の中心軸から微妙に左にずれている。

花茎が作品のど真ん中に位置して、直線的に上に向かっていては面白みのない作品だったに違いない。自然界は「1/f」のゆらぎから成り立っており、それが心地よさを生み出しているのだから・・・。

⑧刷り上がった作品を見た時、わたしは芥川龍之介の相聞歌を思いだした。

また立ちかへる水無月の
嘆きを誰にかたるべき。
沙羅のみづ枝に花咲けば、
かなしき人の目ぞ見ゆる。

⑨高校時代、この四行詩のリズムと叙情性に魅せられて、愛唱していた（以下はわたしの意訳）。

あの人に出会った水無月（陰暦の6月）がまた巡ってきた。
この秘めた想いを誰に語ることができようか。
みずみずしい枝に夏椿の白い花が咲くのを見ると、
愛しい人の瞳を思い出す。

⑩「沙羅」とは沙羅^{さらか}双樹^{そうじゆ}の木ではなく、日本では夏椿のことをいうらしい。夏椿は、可憐な白い花を咲かせ、朝に咲いて夕方には散る一日花である。
花菖蒲の作品のタイトルにうってつけなので、この歌の冒頭の一節を拝借した。

⑪わたしはこの花のいわれを知らなかったが、ずっと気になっていた。
毎年通ううちに、Tさんと気のおけない友だちになって、はじめて花の由来を知った。
もともとは、山野に自生する花菖蒲をもとに、江戸中期に改良をされた長井^{ながい}古種^{こしゆ}らしい。
長い間、地元(山形県長井市)の愛好家たちだけに知られていた門外不出の種である。
40年前、野川に降りたつ白鷺をイメージした「谷地^{やち}の白鷺^{しらさぎ}」の愛称がつけられて、一般に知られるようになった。
まさに、江戸の園芸文化が創りあげた屈指の名花である。秋津も由緒ある花だとは知らなかったが、多くの花菖蒲からこの花を被写体を選んだのは、偶然ではなかった。

2 技巧から心地よさへ

①本人はそれと自覚はしていなかったが、秋津には2つの違った傾向の作品があった。1つは理性的作品、もう1つは感性的な作品である。
はじめのころは、芸術性の高い作品を撮りたいと気負いがあった。目利きの鑑賞に堪える作品を撮りたいという意識が強く、肩に力が入った作品が多かった。
よい作品を撮るために、さまざま工夫し計算する。それが正統的な技法だという思い込みがあった。色彩、構図、質感などの巧みさに捉われていた。

② それを窺わせるのが、「ロゴス」（理性）と題する作品である。



抽象画のようで、一見、花とは思えないが、ハクモクレン（マグノリアの一種）のアップである。

画面の切り取り方、光の取り入れ方、白い花卉の微妙なグラデーションにも独特の感性が感じられる。黄金比やバウハウスの対位法などの、「数学の美」を彷彿とさせる作品である。

学生時代は理数系が得意だった、秋津の空間認識の片鱗がうかがわれる。

③ただし、技巧的に優れているからといって、必ずしも人の心を打つわけではない。

ピンと張り詰めた緊迫感は、見る人にある種の緊張感を抱かせる。

花卉が白味の大理石色だからまだいいが、カーマインレッド(緋色に近い赤)だったらとても見続けられない。寝室に長く飾るのは躊躇する。心が休まらない。飾るならやはり書斎である。

④「ロゴス」とは違い「また立ち返る水無月の…」や「浅き夢見し」(後述)などは、より感性的(というより日本的)な作品である。

秋津がその違いを自覚するようになったのは、6年前のパリの個展がきっかけである。

個展には彼女なりの力作や自信作も出品したが、現地アートのテレビ局、プロの写真家、画家、研究者たちには、むしろ日本的な作品が好評だった。

⑤なぜ力作より日本的な作品が好まれたのか。

思い当たる節がある。写す対象としてのみ花を捉える西欧流と違い、秋津には花に寄り添う温かさが感じられるからではないか。

秋津によると、写すときは花に意識を集中し、静かにゆっくりと息を吐いて、花の世界に入る。すると「わたしが花を観察する」のではなく、「花がわたしに語りかけてくる」不思議な感覚に陥るという。花を外から観察するのではなく、花の中に入り、花と一体となる。無心のときに、その花の個性をはっきりと捉えることができるという。

⑥まさに仏教でいう観想法である。

観想とは「花や鳥や人などの対象に自分の心移し同化することで、対象の真の姿を理解する修行法」である（松原泰道師による）。

花に添って写すうちに、秋津は知らず知らず「花心一体」の境地を身につけたのだ。これは禅の静的集中に極めて近い。

⑦多少の異国趣味はあるだろうが、パリの観客は、西欧流とは違う柔らかさ、温かさ、そして心地よさを日本的な作品に感じたのではないか。

パリの個展によって、秋津は自分の原点をはっきりと自覚した。それ以来、彼女の作品には気負いが薄れ、自然体で撮った作品が多くなった。音楽に例えるとベートーベンより、モーツァルト的な心地よさを感じる作品が多くなった。

「異質の他者」に接することで、彼女は自分自身に自覚めたのである。

3 浅き夢みし



① アトリエから坂を下って2キロほど、海に近い道路の^{のりめん}法面（傾斜地）に、数日前からネムの花が咲き始めていた。

早朝が勝負なので、朝食前に撮しに行った。重いカメラや三脚などの機材があるので、わたしは運転役である。

②夏の夕暮れに花が咲き、翌朝にはしぼんでしまう。そういわれるが、どうも俗説らしい。ただ、儚い命の「1日花」であることは間違いない。

長い花穂の根元は白く、花糸は先に行くに従って濃いピンク色になるグラデーションをしている。頼りなさげだが、いうにいわれぬ風情がある。かすかな甘い香りがする。

③この日、雲の流れは速く、天気はころころと変わる。海風で光が揺らぎタイミングが合わない。

待つことしばし。雲間漏れの光が、薄いピンクの花のまわりに、明るい緑の空間を作った。朝の海光とネムの花の一瞬の出会いである。

④優しい嫺やかな作品ができた。

花茎はほどよく傾き、花弁は半カップ型のカーブをなして画面中央に広がる。

日の光が左から差し込んで、背景に黄緑のグラデーションを創りだす。

ピンクの花が柔らかさを醸しだしている。近くには緋色一色のネムもあったが、それでは柔らかな色調にはならなかっただろう。

⑤右下の緑の塊はおそらく花のつぼみだろう。これをうるさいと見るか、つぼみがなければシンプルすぎると見るか。どちらもありだが、ピンクのネムには花菖蒲ほどの存在感がないので、このつぼみがないと平凡になるかもしれない。

⑥このネム花も、せいぜい2～3日の命である。花は次々と咲くが、それもすぐに終わってしまう。

ありとあらゆるものは変化し、何も恒常なものはない。人は花に人生の儚さを感じとるが、ネムほど命の輝きと移ろいを象徴する花はない。その思いがこの作品には感じられるが、どうだろうか。

⑦この作品を見て、わたしは「いろは歌」の世界を思い浮かべた。

いろは歌は、人生の無常を説き、栄華、栄達に酔うことを戒めた。作者は不明だが、いろは47文字をそれぞれ1回しか使わずに、仏教の神髄を説く歌にまとめあげた。

色は匂へど 散りぬるを（いろはにほへと ちりぬるを）
我が世誰ぞ 常ならむ（わかよたれそ つねならむ）
有為の奥山 今日越えて（うゑのおくやま けふこえて）
浅き夢見し 酔ひもせず（あさきゆめみし ゑひもせず）

⑧どう解釈するか定説がないが、およそこんな意味らしい。

花は咲いてもたちまち散ってしまう。栄華もいつまでも続くわけではない。
そんな迷いの山を乗り越えよ。儚い夢を見たり、酔ったりしてはならない。

⑨この作品が出来た当時、わたしは70代になり、「いろは唄」の教えとは裏腹に、「浅い夢を見て、一生うかうかと過ごしてしまった」との思いが深かった。

秋津と相談して、この作品のタイトルは、自戒を込めて「浅き夢みし」と決めた。